もつれ糸

清水紫琴

青空文庫

「銀さんー」と、女は胸に手を差入れて、切ない思いをこらへながら、みんなあたしが悪かつたの、耐忍しておくれ、ねあたしだつて、何も酔興で、彼家へ嫁入つたといふのじやなしさ、お前さんも知つての通りな羽目になつて、よんどころなく、つひ……」

と男の面をそつとながめて、ほろりとした。年の二十三か四でもあろう。頭髪の銀杏返とうに結つて、メレンスと繻子の昼夜帯の、だらり、しつかけに、見たところ、まだ初々しい世話女房であつた。

「そりや、解つてらア」と、銀と呼ばれた男は、つつけんどんにいつた。酒に靡へてか、よろめく足元危く、肩には、古ぼけた縞の毛布をかけていたが、その姿から見ると、車夫でもあろうか。年は女よりは三つばかり年長に見えた。

大学の大時計と、上野の時鐘とが、言い合わしたように今、十時を打ち出して、不忍池畔の夜は更けた。その静けさを破つて、溝川を越えて彼方の町並を流し行く三味線の音がしんみりと聞こえる。秋といつても九月の末、柳は、もう大概落葉してしまつた。

「でもね。銀さん」と女は改めて呼びかけた。「そりや、あたしにア腹を立つてもおありだらうけども、何もね、伯母さんが知つておいでの事じやあるまいし、いつまでもそんな真似をしていて、伯母さんに苦労を掛けていやうといふの。……立派な手腕を持つておありだし、伯父さんの代からの花主はたんとお有りだらうし、こころを入れ換へてさ。ちいと酒を控目にしてお稼ぎなら、直とむかしの棟梁になつておしまひだらうに、あのこんな事いつちや何だけど、お前その気は無いのかえ」

「無えー」

「無いつてお前……」と、女のことばはつまる。

「無えよ、うむー。正に無え、……俺の手腕はとうにしびれツちまつた。手腕ばかりならいいが、脛も腰も、骨も肉も、ないし魂も根性もだツ、立派に腐つた……。しびれきつてしまつたてえ事ッ。碌でなしだからな」

空を仰いで虹のやうな息を吐く。

「しようがないね」と、のみ、女はさらに愁然として、「お前さんは、そんなにおこつておいでだし、あたしアやる瀬がありやしない」

と、いつか、両袖で顔を隠してしまつた。あはれその心の底は、いかに激しく悶えるのであらう。肩頭よりかすかに顫へた。

しばらく経つてから、「お前そういつておいでだけども、ねえ、銀さん、何も時と時節だわね。そう一酷にさ、いや忌々しいの、腹が立つのといつていたんじや、一日だつて世の中に生きていられはしないよ、世の中が思つたり適つたりで暮らせる位なら、人間にア涙なんてえものアいらないものさ。それがある点がうき世をいつたものじやないの。そりや銀さんは、あたしを不人情者とも、不貞腐れとも思つておいでだろう。もとよりあたしが非いんさ。非いにアちがいないけども、底には底のあるものだよ」

と女はしみじみと語り出した。

渠女は、銀が三年以来の惨澹たる経歴と、大酒飲みになつた事と、真面目に働くがいやになつた事と、この世には望みもなければ、楽しみといふものの光明も認められぬやうになつた事など、落ちも無く銀に語つて聞かされたのである。で、聞く一言一言が、渠女の身

に取ると、胸に釘を打たるる思ひ。その場へ昏倒するのではないかと思はれた事も幾度かであつた。渠女は始終、涙と太息とで聞いてしまつて、さて心の糸のもつれもつれて、なつかしさと切なさとに胸裡は張り裂けんばかり、銀が今の身の上最愛と思ひつめては、ほとんど前後不覚。よし自分の身辺にまつはる事情や行懸りをうつちやつても……。我が身を引ン裂いてなりと、まのあたり銀が餓えと恥辱に呵責まるる苦痛をすくはうと煩悶した。あせつたのである。身※りしたのである。けれども、女の身の格別好いちえも分別も出なかつた。

そこで女は、とやかう思案を煎じつめた挙句、「ままよ」とつぶやいたかと思ふと、さきにその所夫から預けられて、問屋場へ持つて行くべき、少なからぬ、なにがしといふ金を懐中から取り出した。包みのまま、銀につきつけて、それでもつて撲ち殺してある、鉋や鑿や鋸や、または手斧や曲尺や準縄や、すべての職業道具受け出して、明日からでも立派に仕事場へ出て、一人の母にも安心させ、また自分の力にもなつてくれるやうにと、縋りつくやうにして泣き且つ頼んだ。そして

「ねえ、お願いだから」

とこれが最後のことばであつた。

けれども、性来執拗な銀は、折角の好意も水の泡にしてしまつて、きつぱりその親切を、はねつけた。小気味よく承知しなかつた。渠のいふ所によると、これでも舊は「大政」ともいはれた名たたる棟梁の悴である。よし、母子二人倒死するまでも、腹の中をからにして往生するにもしろ、以前、我が家の昌つた頃、台所から這ひずつて来て、親父の指の先に転がされて働いた奴等の下職人とはなつて、溝板修覆しや、床などの張換へして鉋を磨いて痩腹膨らかすやうな、意気地の無い、卑劣な真似は、銀が眼の玉の黒いうちは、なんとしてやれぬといつた、いやだといつた。侮蔑つて貰ふまいともいへば、心外だともいつた。つまり銀はあくまでも女の請ひをはねつけたのであつた。

「お前がそういつて剛情を張つておいでのところを見ると、何うしてもあたしが彼家へ嫁入たのを根にもつて、あたしを呵責めて泣かして、笑つてくれやうと思つておいでなのにちがひない。そりやあんまり酷いといふものじやないの、え、銀さん」

と女は途方に暮れて泣くばかりであつた。で、僻むだやうな愚痴も並べ出して、

「そんなに慍つてばかりいないで、あたしのいふ事もちつたァ聞いておくれな。あたしが彼家へ行つた当座、お前がだんだんいけなくおなりだという噂が、ちらりあたしの耳へ這入つた時、あたしァ、……あたしァまあどんなにかつらかつたらう。いつそ、彼家を出てしまはうかと思つた事も、そりや五度や三度じやなかつたね。あたしだつて人間だもの、まさかお前の心の悟めていないでもなかつたけれど、そこにア、それ……、かういつちや勿体ないけどまつたくさ。阿父さんてえ人が居なすつて、どうにもあたしの心のままにアならなかつたの、そのうち阿父さんは死んでおしまひだし……」

「な、なに?」と銀は眼を※つて、「親父が亡くなつたえ。え、何時」

「一昨年の夏さ」といつて、女は面をそむけて、啜り上げた。「それからというものは帰らうにも実家はなしさ、心の中じや力に思つ

ていたお前までが、どこへか引越しておしまひだし、……あたしはほんのひとりぼつちになつてしまつたの。だからさ、何もみんな無い往昔(むかし)とあきらめてしまつてさ。ねえ、銀さん。両人(ふたり)していたちこつこして遊すんだ時分のあたしだと思つて、これだけあたしのいふ事を承(き)いておくれな、一生のお願ひだわ」

　石のやうに固くなつて聞いていた銀は、やおら、面をあげて勢い好く、「よしッ！　解つた」

「あの、承いておくれか」

「む、む！、永い事ァ厄介かけたねえ、なんの一年ばかし面倒見といてくんねえ。銀も男だ、今更他人(ひと)の下職(したた)人は働かねえが、ちつとばかし目論見があるんだ。そのうち訪ねて行つた時の姿を見てくんねえ。きつとだ。男になつて行かア！」

「好くまァそういつておくれだ。そいであたしア……」としばらく口も利き得なかつた女の眼の内には、喜悦と満足と而して感謝の意の相混じて見られた。（『万朝報』一八九九年八月）

青空文庫情報

底本：「紫琴全集　全一巻」草土文化
　　1983（昭和58）年5月10日第1刷発行
初出：「万朝報」
　　1899（明治32）年8月
入力：門田裕志、小林繁雄
校正：松永正敏
2004年9月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

もつれ糸

清水紫琴

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/